



■学校給食米の全てを有機米に

給食、全て有機米に 全国初、いすみ市が実現 | 千葉日報オンライン

給食、全て有機米に 全国初、いすみ市が実現

2017年10月27日 20:40

いすみ市は27日、全13市立小中学校の給食で使用するご飯について、全量を無農薬無化学肥料の有機米に改めた。今後、継続して実施する。市は環境保全型農業を推進し、給食のご飯は有機米で賄うとの目標を掲げていた。こうした試みは全国初という。

市は2013年、「自然と共生する里づくり」の一環で有機米の生産を働き掛けた。当初参加した農家は3人、面積は約0・2ヘクタール、収穫量は約0・24トンだったが、毎年、作付面積を増やしていく、今年はそれぞれ23人、約1.4ヘクタール、約50トンと拡大。全小中学校の計約2300人分の使用量となる約42トンを賄うことが可能になった。

市は15年、農家の所得向上を狙い、有機米を「いすみっこ」と名付けてブランド化。食の安全と環境に配慮し、学校給食でも一部の日で提供していた。

この日は有機米の全量使用開始を記念し、地元の古屋谷営農組合（岩瀬幸雄組合長）で有機米作りを体験していた夷隅小で、生産者らと一緒に食事をするイベントが開かれた。児童は艶やかな白米を「いただきます」と頬張った。

岩瀬組合長は「稲の管理が大変だが、安心で安全なご飯を小中学生に食べてもらえてうれしい」と顔をほころばせた。太田洋市長は「自然に近い食べ物で生活することが大事。5年かけて提供することができた。生産者が丹精込めて作った素晴らしい米」と呼び掛けた。

並田夢叶さん（11）は「もちもちしている」と満足顔。祖父が農業をしている藤平凌君（11）も「毎日の給食が楽しみ。農家を継いで、おいしい米をみんなに食べてもらいたい」と声を弾ませていた。



有機米のご飯を頬張る児童＝27日、いすみ市の市立夷隅小学校

■世界の給食、オーガニックへ

フランス

フランスは2022年までに、給食食材のオーガニック(有機)比率を50パーセントにすることを法律で定める。現在、フランスの学校給食のオーガニック率は、全国平均3パーセント。南仏のムアン・サルトゥー市ではオーガニック率100パーセントを実現している。

サステナブル・ブランド ジャパン2017.12.04より抜粋

イタリア

イタリアの有機農産物卸売業者の卸先内訳にあるように、学校給食向けは売上げの26%を占めており、重要な販売先の一つとなっている。学校給食への取り組みは州によって大きな違いがあり、導入が最も盛んなエミリア・ロマーニャ州は、州法によって2歳までの保育園児の給食は100%有機にすると規定している。

「イタリアの有機農産物の現状調査」JETRO2009年3月より抜粋

韓国



2021年からソウルのすべての小・中・高校で「オーガニック無償給食」が全面施行される。市はまず来年から高等学校のオーガニック食材使用の割合も現在の30%からオーガニック学校給食水準である70%まで引き上げる。市は、オーガニック無償給食がすべての小・中・高1302校に拡大施行されれば、人件費と管理費を含めて年間約7000億ウォン(約700億円)の予算がかかると見ている。

ハンギョレ新聞2018.10.29より抜粋

■いすみ市と農業の概要

基礎データ

| | | | |
|---------|---|------|---|
| 位置 | 北緯35度 東経140度 | | |
| 面積 | 157.5km ² | 人口 | 2010 40,962 → 2018 38,787 |
| 合計特殊出生率 | 2010 1.36% → 2016 (1.39%) (1.44%) | 高齢化率 | 2010 33.2% → 2016 (23.0%) (27.3%) |

農業データ 2015年農林業センサス

| | | | | | |
|---------------------|-------------------|---------------------|----------------|-----------------------|---------------|
| 田耕地面積 | 2,940ha | 畑耕地面積 | 582ha | 林野面積 | 6,659ha |
| 農業産出額 米 | 208千万円 | 農業産出額 野菜 | 55千万円 | 農業産出額 果実 | 52千万円 |
| 経営体数・ 作付面積 水稻 | 961経営体 1,728ha | 経営体数・ 作付面積 野菜 | 164経営体 25ha | 経営体数・ 作付面積 日本なし | 66経営体 37ha |

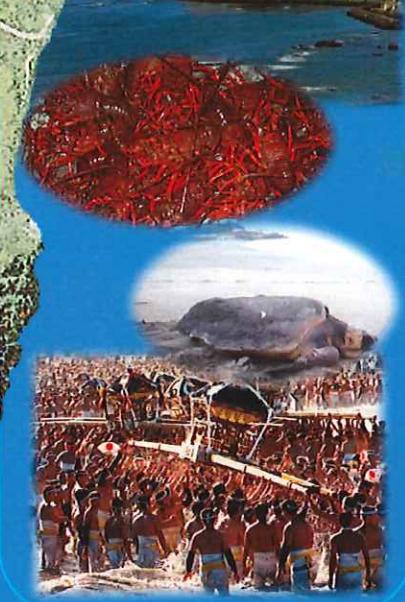
夷隅川に由来する肥沃な土壤と豊富な水資源を活かした良質米づくりが主。温暖な気候を活かした小規模点在型の野菜づくりと果樹(なし)栽培。

■夷隅川でつながる里山・里海地帯

社会生態学的生産ランドスケープ (Socio-ecological production landscapes and seascapes) と 水田農業を基盤とする地域



社会生態学的生産シースケープ (Socio-ecological production landscapes and seascapes; SELPs) 沿岸漁業を基盤とする地域



ミヤコタナゴ(絶滅危惧種IA類)
Tokyo Bitterling(endangered IA, IUCN)

田舎暮らし

発表! 2019年版 第7回

「住みたい田舎」 ベストランキング

- 大分県壹岐後高田市が7回連続ベスト3入りを達成!
- 鳥取県鳥取市が3部門で1位に!
- 千葉県いすみ市が新設「自然のまみ」部門1位

編集部注目

**全国12エリア別トップ10 &
編集部注目のユニーク自治体**

北海道、東北、北関東、首都圏、東陸、甲信、東近畿、近畿、中濃、西濃、九州、南九州
各部門トップ10市町村を発表！



人口10万人未満の
小さなまちランキング

• 100 •

大分県豊後高田市
農林水産課

人口10万人以上の
大きな市をランキング

人気な♪♪♪

自然の恵み

鳥取県鳥取市

卷之六

廣東省書畫藝術

福岡県北九州市

| 子供は性別が好みない理由 | | 若者世代が好みない理由 | | 総合 | |
|--------------|-------|-------------|-------|---------|-------|
| 1位 女の子 | 41.8% | 1位 女の子 | 38.3% | 1位 女の子 | 37.1% |
| 2位 男子 | 40.7% | 2位 男子 | 27.5% | 2位 男子 | 27.1% |
| 3位 女王道 | 41.7% | 3位 女王道 | 29.4% | 3位 女王道 | 29.3% |
| 4位 おしゃれ | 44.8% | 4位 おしゃれ | 35.7% | 4位 おしゃれ | 34.8% |

| | | | | | |
|-------|--------|-------|--------|-------|--------|
| 6-千葉県 | 44,324 | 5-千葉県 | 23,564 | 6-千葉県 | 53,854 |
| 6-千葉県 | 44,406 | 6-千葉県 | 20,914 | 6-千葉県 | 55,704 |
| 7-千葉県 | 44,176 | 7-千葉県 | 20,514 | 7-千葉県 | 53,516 |
| 8-千葉県 | 41,504 | 8-千葉県 | 19,934 | 8-千葉県 | 53,426 |
| 9-千葉県 | 41,874 | 9-千葉県 | 19,234 | 9-千葉県 | 53,156 |

| 自然の美み | ランク |
|--------|-----|
| 千葉県館山市 | 1位 |
| 埼玉県秩父市 | 2位 |
| 宮城県仙台市 | 3位 |



株式会社宝島社発行の
『田舎暮らしの本』2019年2月号
「2019年版住みたい田舎ベストランキン」
☆首都圏エリア総合1位☆になりました。

いすみ生物多様性戦略

「いすみ生物多様性戦略」の7つの対策の柱と重点事業

市民の皆さんから寄せられた生物多様性にかかる課題と取組に関するご意見（463件）をもとに、7つの対策の柱を立て、各対策ごとに複数の取組事業（全186件）を策定しました。
そしてさらにその中から以下の重点事業（33件）を設けました。

| 環境改善の分野 | 普及・利用の分野 | 基盤整備の分野 |
|---|--|---|
| 1 里山里海の自然・文化の保護・保全 (事業件数41、重点5) ◇ウミガメを守り育てる活動の推進 ◇コウノトリが生息できる自然環境の整備 ◇国指定天然記念物「ミヤコタナゴ」生息地の保全 ◇希少生物保護のための基金設立の検討 ◇夷隅川河口湿地の保全と再生 | 4 地域環境や先人の知恵の学び・継承 (事業件数21、重点5) ◇「いすみ生物多様性先人の知恵物語（仮称）」の作成 ◇いすみ市の生物多様性に関するカリキュラムの開発と各学年の教育課程への位置づけ ◇各小学校に水田ビオトープの創出と水田の生きもの観察・調査 ◇生物多様性の保全と持続可能な里山里海の暮らしについての講座開催 ◇いすみ子育てジャンボリー（幼児と保護者）の開催 | 6 生物多様性を活かした産業創造 (事業件数37、重点12) ◇人もコウノトリも暮らせる農村環境整備の推進によるいすみブランドの確立 ◇食味が自慢の「いすみ米」ブランドの創出 ◇化学肥料・農薬使用を低減した環境にやさしい農業による農産物のブランド化の推進 ◇いすみブランドづくりの推進 ◇新規水産加工品の発掘支援 ◇加工品の付加価値を高めた水産物のブランド化の促進強化 ◇食を中心とした新たな観光の推進 ◇「生物多様性を活かした産業創造懇談会（仮称）」の設置 ◇都市住民を対象としたツーリズムの推進 ◇漁地選定による全国を視野に入れた消費拡大と販路拡大の検討 ◇新たな観光資源の発掘といすみブランドの創出・育成・強化 ◇いすみ市の食材を活用した食事メニューの開発 |
| 2 里山里海の放棄・荒廃地の再生・管理 (事業件数48、重点6) ◇自然と共生する里づくりモデル水田事業 ◇自然と共生する里づくり ◇環境保全型農業の推進 ◇環境保全型農業と経済の自立促進・支援 ◇環境保全型農業基礎の整備促進 ◇小・中学校での「生物多様性教育」 | 5 生命感じる自立・循環のライフスタイル (事業件数15、重点3) ◇学校給食での有機米・有機農産物の使用 ◇水田ビオトープ・校区の子ども自然体験フィールドの確保 ◇空き家バンクの運営 | 7 生物多様性を担う組織・拠点の設置 (事業件数8、重点5) ◇生物多様性いすみステーション（仮称）の設置と運用 ◇生物多様性いすみステーション（仮称）によるNPOや市民との連携活動促進 ◇生物多様性いすみステーション（仮称）による千葉県生物多様性センターやいすみ環境と文化のと、大学、研究所などの連携 ◇生物多様性いすみステーション（仮称）による「町内いすみ生物多様性戦略連絡会議」の運営 ◇いすみ生物多様性戦略にかかる施策の推進 |
| 3 外来生物・野生鳥獣害の防除・管理 (事業件数16、重点2) ◇いすみ市外来生物・野生鳥獣害対策協議会（仮称）を設置 ◇千葉県生物多様性センター等との連携・協力 |    |   |

市民の役割
市民の方々には、生物多様性の楽しみが私達の生活を支えていることを理解し、生物多様性に配慮したライフスタイルを実践することが望まれます。また、家族や特に子どもたちへ自然の大切さを伝え、自然や生きものとのふれあいの場づくりをはじめ、地域内外でのさまざまな生物多様性の保全・再生の活動に参加することが期待されます。

環境と経済の両立を目指す協働のまちづくり

地域資源の活用や地域産業の競争力強化を図るためにには、自然資本の維持・増大が不可欠
里山地域の活性化には、多様な主体の協働による統合的なアプローチが必要



UNDP-J連携事業(2018)

いすみ生物多様性戦略 2015年策定

自然と共生する里づくり協議会 2012年設立
環境部門 農業（水稻・野菜）部門 経済部門 45団体

先導的プロジェクト：有機稻作の推進 2014年～



コウノトリ
●環境創造活動のシンボル
●生物多様性保全・再生の指標種
フラッグシップ種

環境教育
体験活動
都市農村交流

ブランド化推進
実証試験
普及・啓発



■衰退する水田農業 課題

◆米価の下落(60kg一等米)

1996年 18,300円

2016年 11,700円 約64%下落

◆農家の高齢化

65歳以上の割合 いすみ市 76%

全国平均 65%

生産意欲の減退 ⇒ 離農者の増加

耕作放棄地の増加 ⇒ 里山の荒廃

野生鳥獣の増加

景観の悪化

コミュニティの衰退



■環境と経済が両立する有機稻作

●再生産可能な価格水準

JA農家手取り(60kg) 有機米20,000円以上 慣行米13,000円
小売価格(精米5kg) 有機米 3,500円以上 慣行米 2,400円

●需要は拡大傾向

食に対する安全・安心志向の高まり

栽培技術の確立と普及

販路の開拓

持続可能な農業経営を実現

生物多様性の保全・再生 ⇒ 農業振興・農村の活性化

教育

交流

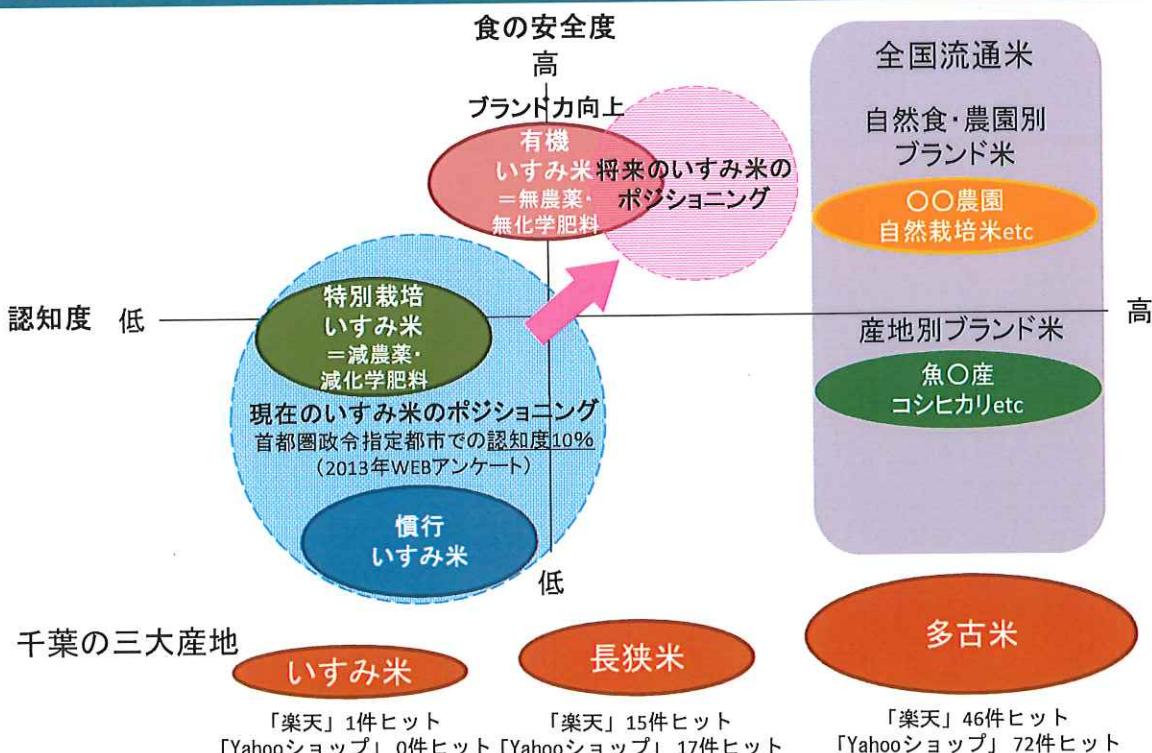
福祉

観光

広報

有機稻作の多面的な価値を活かして地域活性化を図る

■いすみ米の認知度を上げるには何が必要か?



現実は厳しい...

いすみ米の認知度はかなり低い

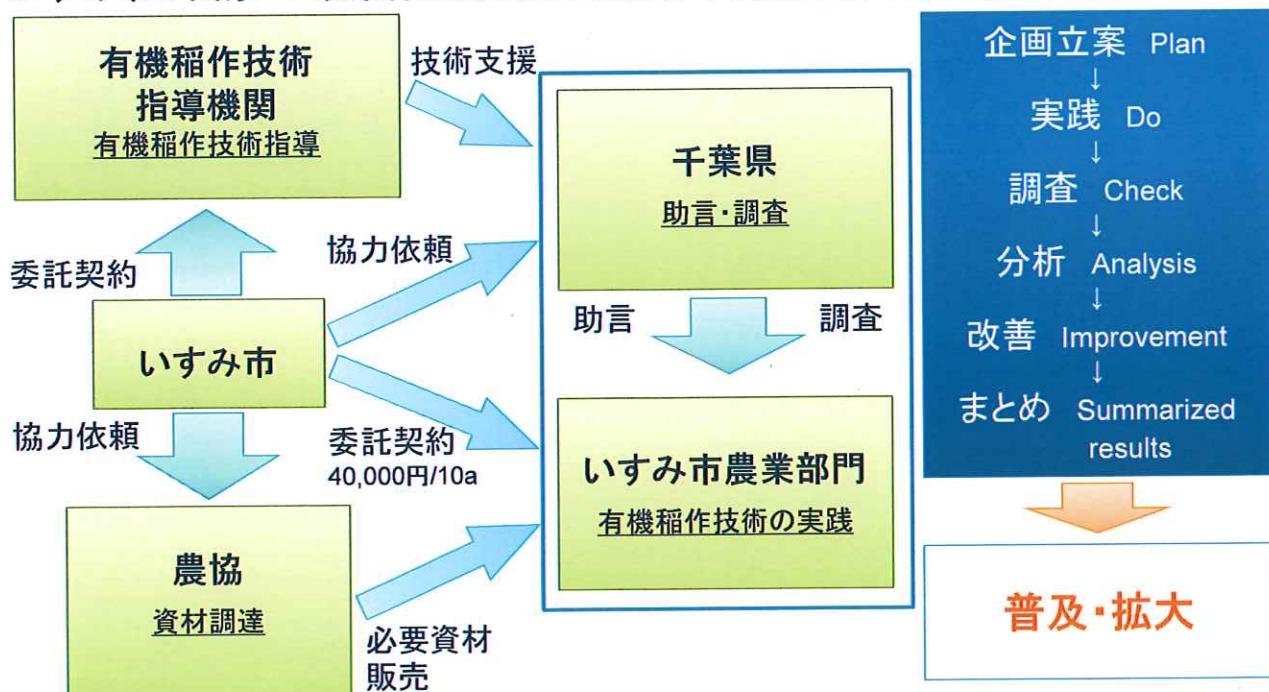
■2013年22aで始まった手探りの無農薬栽培



やせ我慢の無農薬栽培では続かない、広がらない
“根本から学ぶ”姿勢へ転換

■有機稻作モデル事業 2014-2016年

いすみ市の気象・土壤条件にあつた有機稻作準技術体系の確立を目指す



有機農家の育成

■有機稻作モデル事業の成果

| 年度 | 取組面積 | 農家戸数 |
|----------|--------|------|
| 2013 開始前 | 22a | 3 |
| 2014 | 110a | 5 |
| 2015 | 450a | 15 |
| 2016 最終年 | 870a | 15 |
| 2019 | 1,800a | 24 |

水稻有機栽培の標準技術体系と地域独自の普及指導体制を整備
↓
2017年から本格的な増産体制に移行

■学校給食米の全てを有機米に

- 安心・安全なお米を子どもたちに提供したい
- 子どもたちに地域の農業や環境のことを知ってもらいたい

| 年度 | 有機米導入量 | 割合 |
|------|--------|------|
| 2015 | 4t | 11% |
| 2016 | 16t | 40% |
| 2017 | 28t | 70% |
| 2018 | 42t | 100% |

全国に先駆け、学校給食のお米を全て有機米に

有機農産物
の生産拡大

有機農産物
の消費拡大

食育の推進

地域イメージ
の向上

持続可能性、循環型社会への転換を促進

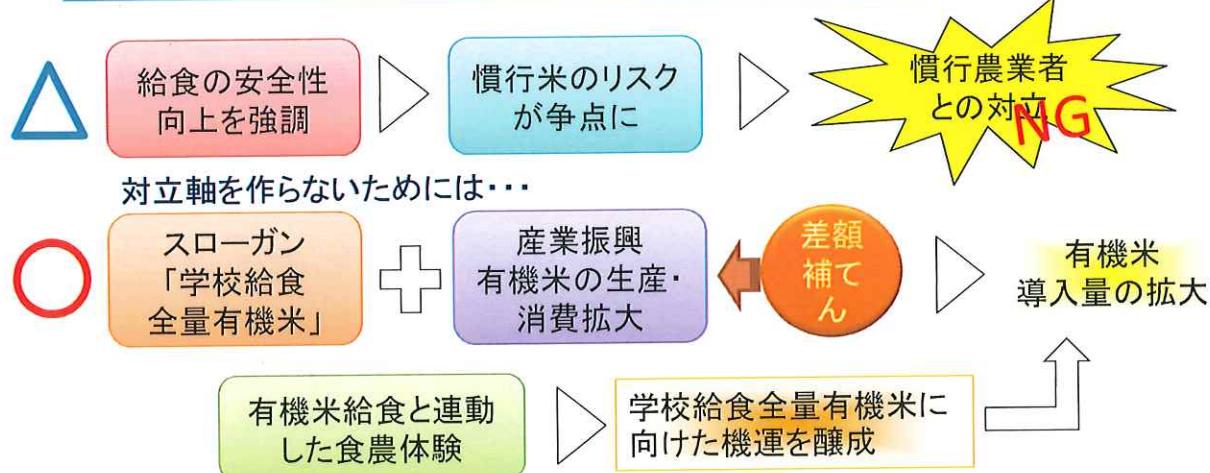
■学校給食全量有機米に向けたプロセス

有機米と慣行米との価格差は147円/kg
一食当たり85g、米飯支給回数月平均13.5回とすると
 $147\text{円}/1,000 \times 85\text{g} \times 13.5\text{回} = 169\text{円}$

学校給食全量有機米に伴う

1か月の給食費値上げ分 169円 ←意外と安い！

がしかし、給食費値上げ＝家庭の所得と係るナーバスな問題



■環境に配慮した農産物のブランド化



JAL国内線ファーストクラスのおもてなし
日本各地の名店プロデュース機内食
千葉県
一切秋を彩る地元食材を創作日本料理で～
JAPAN PROJECT

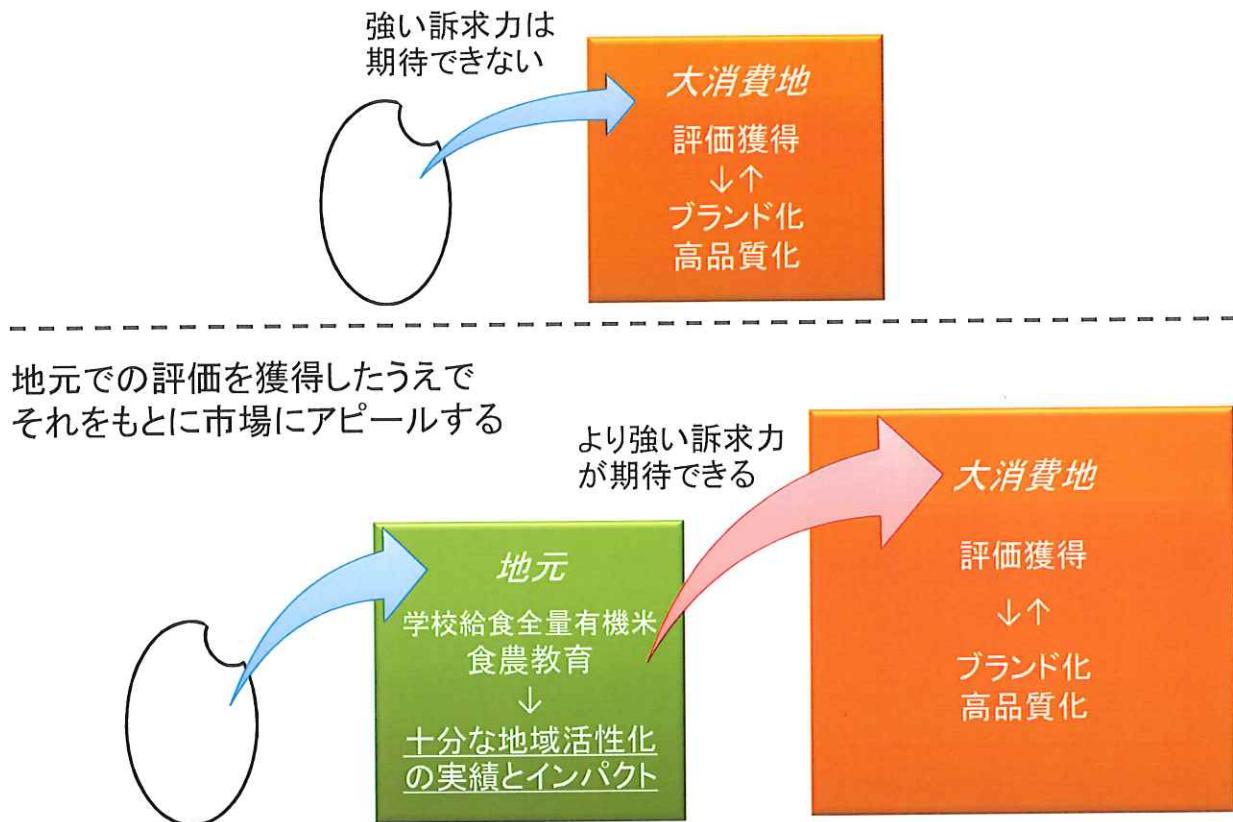


Japan Airlines adopted the rice as in-flight meals of first class (2016)
日本航空ファーストクラス機内食に採用

公益的な視点を活かしたブランド戦略



■「いすみっこ」のブランド戦略

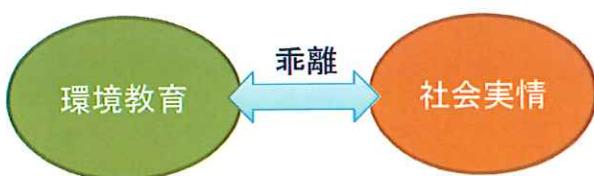


■有機米給食と連携した食農教育

環境と農業と食を一体的に扱う教育プログラムの開発に着手
一年間で45分×30时限を扱う



- ◆環境教育と食育と農業体験が
一体化的に扱われていない
→農業のもつ多面的価値が理解されない



健全な環境が、自身の健康と
健全な社会を保障している

■学校給食へ地場産有機野菜を導入

学校給食有機野菜供給体制構築事業 2018年～

●給食センターの現体制で無理なく使用できる品目から優先

2018年度は、有機ニンジンと有機コマツナ

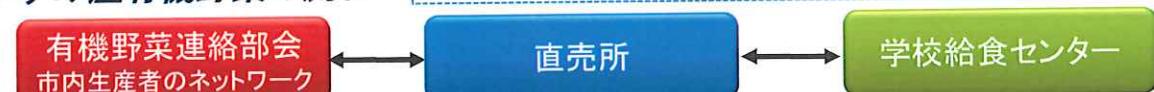
2019年度は、上記に加え、有機メークイン、有機タマネギ、有機ネギ、有機ダイコン

通常の給食野菜の流れ



いすみ産有機野菜の流れ

品目選び～作付け、納入まで、定例会で協議－事務局：農林課



作付け・出荷調整会議



学校栄養士による生育確認

■有機農産物の学校給食 バイブル



■土着菌完熟堆肥で野菜の有機栽培も推進

いすみ市土着菌完熟堆肥センターの設立 2017年

●地域の未利用資源を活用して循環型の有機農業を促進

●水稻だけでなく小規模多品目の野菜でも有機栽培を推進していく



■有機農業で元気な地域を次世代に受け継ぐ

